

International Union for Quaternary Research

INQUA: 国際第四紀学連合



INQUA小委員会 提案シンポジウム

世話人：齋藤文紀、出穂雅実

主催：日本学術会議 地球惑星科学委員会
国際連携分科会、地球・人間圏分科会
共催：日本第四紀学会、
島根大学エスチュアリー研究センター
後援：日本旧石器学会、日本人類学会、
日本考古学協会、地球環境史学会、

日本学術会議公開シンポジウム

最終氷期以降の日本列島の気候・環境変動と人類の応答

2023（令和5）年6月11日（日）13:00～17:20
オンライン開催（事務局主会場：島根大学）

【開催趣旨】 今よりも暖かかった12万年前の最終間氷期を過ぎると、地球は最終氷期と呼ばれる寒冷な気候に移行しました。ヒト（現生人類）は、この最終氷期にアフリカを離れユーラシアへ、またオセアニアや南北アメリカに広く拡散していきます。日本列島には3万8千年前にヒトが生活していたことがわかっています。最近の十数年間に、古気候、古環境や人類・考古の研究は大きく進展し、多くの新しい発見がありました。本シンポジウムは、人類はどのように気候変動や環境変動に応答し現在に至ったかを、日本列島を中心に古気候、古海洋、人類、考古の各専門分野の最前線で活躍する人たちが、最新の研究成果とともに紹介します。

（世話人：齋藤文紀、出穂雅実）

- 13:00 開会挨拶・趣旨説明
齋藤文紀 日本学術会議連携会員、島根大学エスチュアリー研究センター長・特任教授
- 13:10 過去15万年間の気候変動
阿部彩子 日本学術会議連携会員、東京大学大気海洋研究所・教授
- 13:30 現生人類がたどってきた道
海部陽介 日本学術会議連携会員、東京大学総合研究博物館・教授
- 13:50 アイスエイジから現在までの海水準：ヒトは歩いて海峡を渡れたか？
横山祐典 東京大学大気海洋研究所・教授
- 14:10 最終氷期における日本周辺の海洋環境
郭新宇 愛媛大学沿岸環境科学研究センター長・教授
- 14:30 休憩
- 14:40 年縞から見た「暴れる気候」と人間の歴史
中川毅 立命館大学古気候学研究中心長・教授
- 15:00 日本列島の現生人類文化の出現、定着、変化
出穂雅実 東京都立大学人文社会学部・准教授
- 15:20 古代ゲノムから見た日本列島の現生人類
太田博樹 東京大学大学院理学系研究科・教授
- 15:40 休憩
- 15:50 樹木年輪から見た年から十年単位の気候変動
中塚武 名古屋大学大学院環境学研究科・教授
- 16:10 縄文・弥生社会の環境構築
松本直子 岡山大学文学部・教授
- 16:30 総合討論
長谷部徳子 日本学術会議連携会員、金沢大学環日本海域環境研究センター・教授
出穂雅実 東京都立大学人文社会学部・准教授（司会）
- 17:10 閉会挨拶
諏訪元 日本学術会議連携会員、東京大学総合研究博物館・特任教授
- 17:20 閉会

主催：日本学術会議 地球惑星科学委員会国際連携分科会、地球・人間圏分科会
共催：日本第四紀学会、島根大学エスチュアリー研究センター
後援：日本考古学協会（予定）、日本旧石器学会、日本人類学会、地球環境史学会



事前登録制（先着300名）、参加費無料
申込先：https://www.leaf2.shimane-u.ac.jp/enquete/no/inqua_symp
申込締切：2023年6月7日（水）
申し込みされた方に、ZoomのURLをお送りします。



お申し込みはこちら

International Union for Quaternary Research

INQUA: 国際第四紀学連合

設立

本団体は1928年にコペンハーゲンにおいてヨーロッパの16ヶ国が学際的な研究によって第四紀の環境変化に関する理解を深めるために設置した組織が最初で、1965年に開催された第7回大会から現在の名称となり、現在に至っている。多分野にまたがる第四紀学を代表する世界で唯一の団体。現在は、日本学術会議が参加する国際学術会議のユニオンメンバーの一つ。

目的

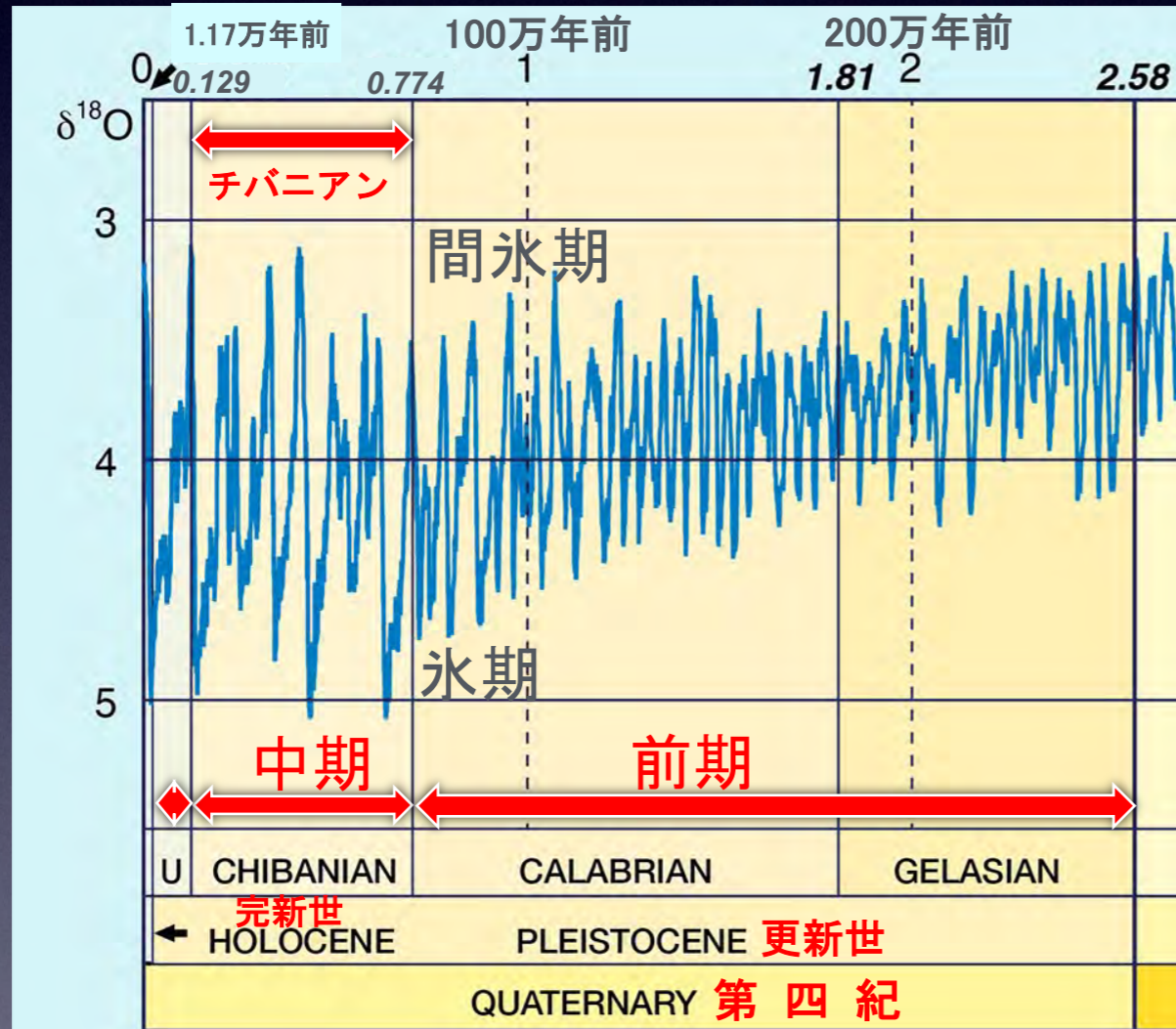
最も新しい地質時代である第四紀（258万年間）における地球環境の変化、また人類との関係を明らかにするため、俯瞰的また学際的視点からの研究を促進すること、また途上国・若手の研究者育成と国際協力を促進すること。

最新の地質時代における地球環境変動の規模と進行速度の解明は、地球規模の環境変動の現状と将来予測を評価する上で最も重要です。気候変動、地震・津波・火山活動、人間活動の影響など、これらを多分野から総合的に、学際的に扱うのが第四紀学です。

Quaternary: 第四紀 (だいよんき) とは

258万年前から現在までの地質時代で気温や海水準などが大きく変動した時代。気候の寒冷期(氷期)と温暖期(間氷期)が繰り返し、海水準は100m以上も変動した。人類は、原人から現生人類へ進化。

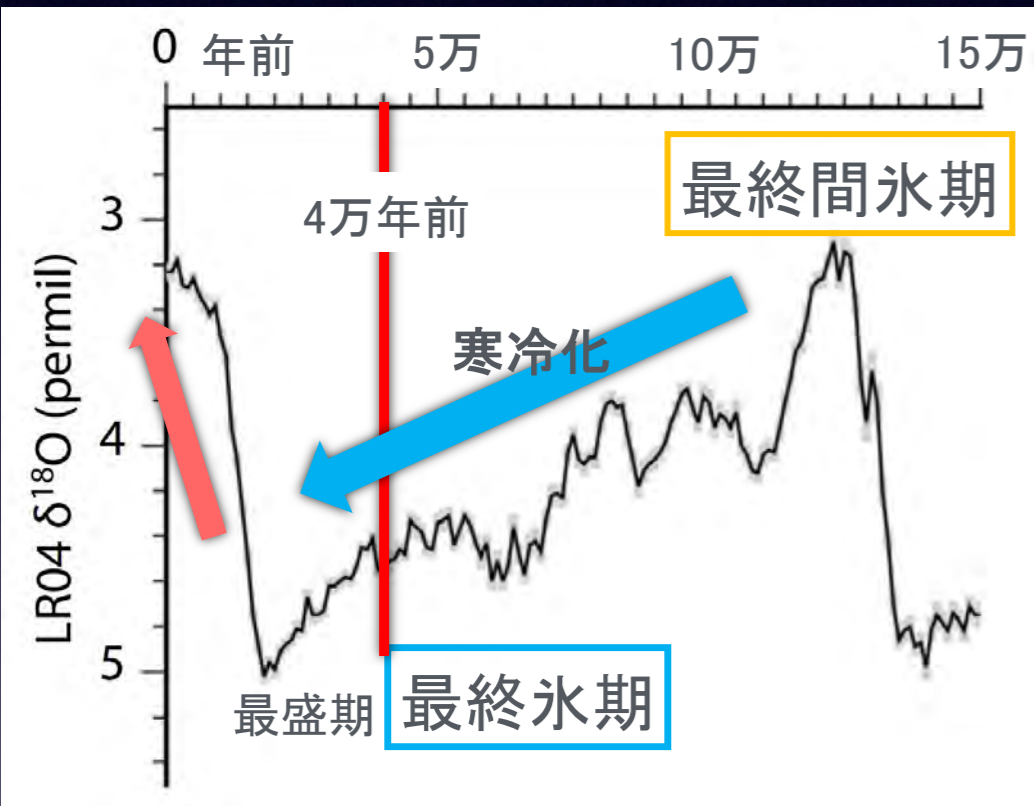
第四紀 (Quaternary)



界/代 (累)界/代 系/紀	統/世	階/期	GSSP	年代/ 百万年前	
新生界/代	第四系/紀	完新統/世	メガラヤン	現在	
			ノースグリッピアン	0.0042	
			グリーンランディアン	0.0082	
			上部/後期	0.0117	
	更新統/世		チバニアン	0.129	
			カラブリアン	0.774	
			ジェラシアン	1.80	
				2.58	
	新第三系/紀	鮮新統/世		ピアセンジアン	3.600
				ザンクリアン	5.333
中新統/世			メッシニアン	7.246	
			トートニアン	11.63	
			サーラバリアン	13.82	
			ランギアン	15.97	
			バーディガリアン	20.44	
	アキタニアン	23.03			
	チャッティアン	27.82			

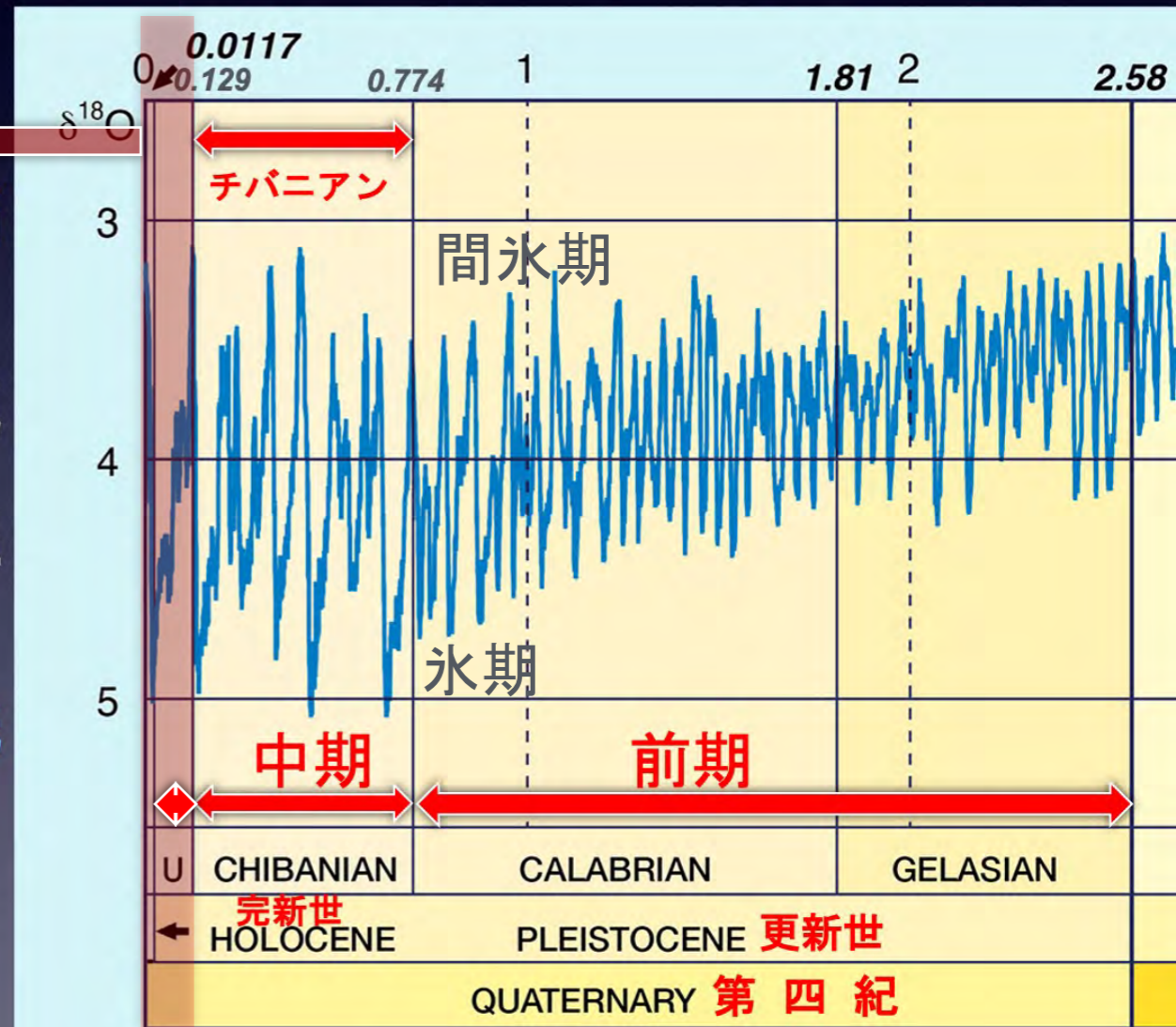
第四紀は更新世と完新世に分けられ、中期更新世が2020年にチバニアンと命名された。

本日のシンポジウムはチバニアンが終わる12.9万年前以降を対象にしています。12万年前は、現在よりも暖かく最終間氷期と呼ばれ、海水準は今よりも5-10m高かったと推定されています。その後、最終氷期と呼ばれる寒冷期に向かい、約2万年前に最も海水準が低下しました。この寒冷化に伴って現生人類（ヒト）は、アフリカを離れ世界に拡散してゆきます。日本にも38,000年前には到達していたことがわかっています。最終氷期の最盛期が終わると急速に温暖化が進み、縄文文化など様々な文化が展開されるようになります。気候や環境の変動がどのように人類に影響を与え、人類が応答してきたか。本シンポジウムのテーマとなります。



高 暖 高
海水準 気温
低 寒 低

底生有孔虫殻の
海洋酸素同位対比
変動曲線 LR04

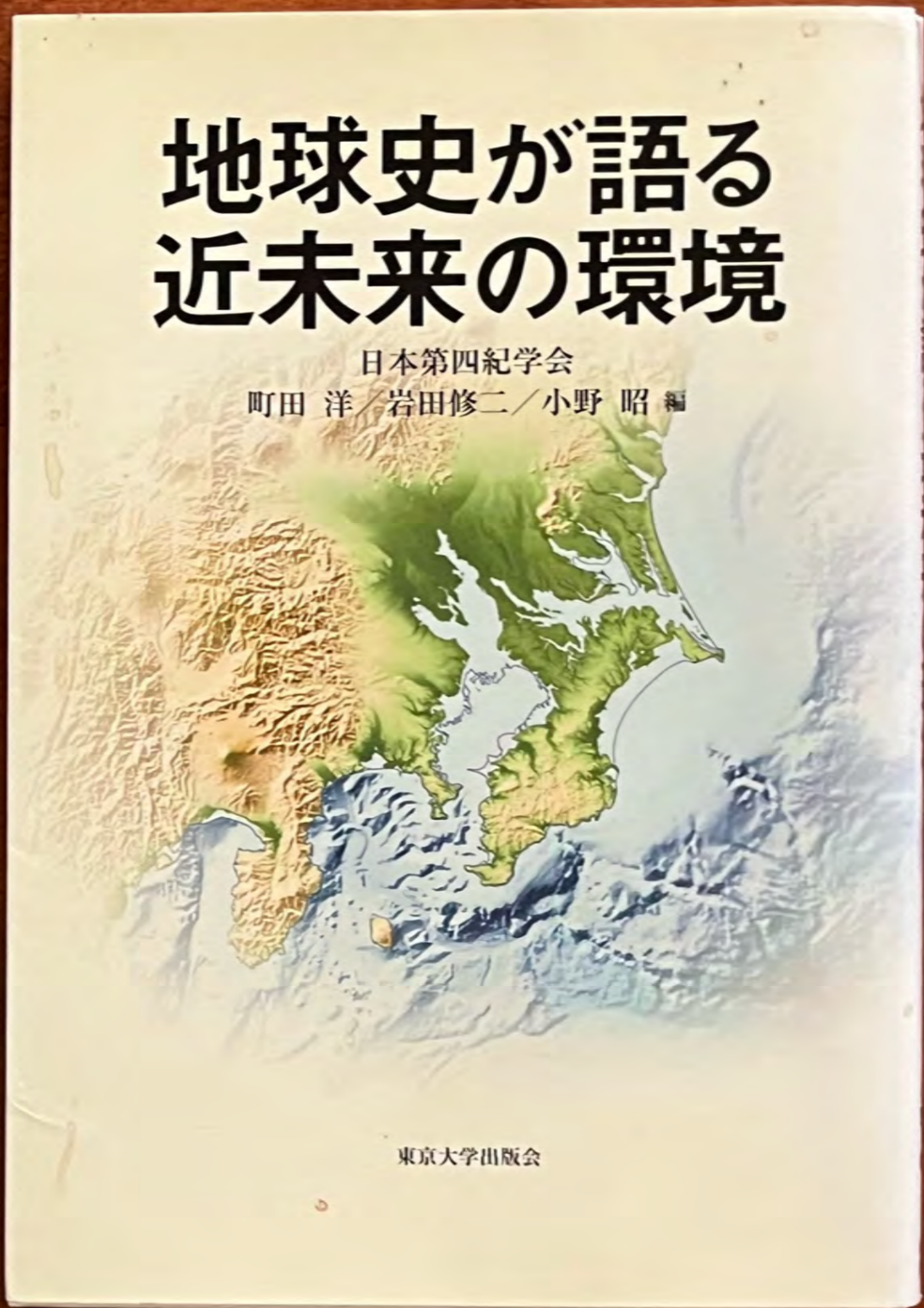


第四紀は更新世と完新世に分けられ、中期更新世が2020年にチバニアンと命名された。



1987年出版
 1985年の日本学術会議の
 シンポをもとに出版

貝塚爽平、加藤芳朗、小疇尚編



2007年出版
 2004年の日本学術会議の
 シンポをもとに出版

町田洋、岩田修二、小野昭編